

## T/V 式言語と日本語における二人称代名詞の比較： 歴史・社会・対照言語学的アプローチ

バーク アンドリユー・上原 聡  
東北大学大学院国際文化研究科  
{abarke, uehara} @insc.tohoku.ac.jp

### 1. はじめに

日本語に現れる人称代名詞と、英語・ヨーロッパの言語に現れる人称代名詞を比較すると、かなり異なる点が多いといわれている。例えば、ヨーロッパの言語の殆どには、二種類の二人称代名詞が対立した形で存在しているに対して、日本語には多数の形が見られる：アナタ、アンタ、オマエ、キミ、キサマ、テメエ。また、日本語の人称代名詞は、談話に現れる頻度は比較的少ないという。

日本語の人称代名詞より多く使われているヨーロッパの人称代名詞はBrown & Gilman (1968) の分析では、その使用は「power」（力関係）と「solidarity」（親密度）という二つの要因の影響で説明できるという。ヨーロッパの殆どの言語には、親密さ、または丁寧さを示す二種類の二人称代名詞が存在し、ラテン語のtuとvosから生まれたということで「T/V」代名詞と呼ばれている。ヨーロッパの言語だけではなく、他の言語例えば旧ジャワ語・フィジー語に同じような現象が見られると言われている。そうであれば、日本語の人称代名詞はどうなっているのか。T/V式言語のように、使用を「power」と「solidarity」の影響で説明できるのか。それとも、種類の数の違い・使用頻度の違いは他の要因の存在を示しているのか。本研究では、T/V式代名詞と日本語の二人称代名詞の語源・歴史を比較し、上記のような問題を解決したい。

### 2. T/V 代名詞

表 1: Brown & Gilman (1968) による T/V 式言語の例

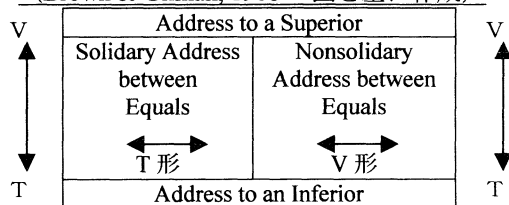
	二人称代名詞単数形	
	T (親密)	V (丁寧)
(英語)	(thou→ye→) you	you
ラテン語	tu	(tu→) vos
イタリア語	tu	(voi→) Lei
フランス語	tu	vous
スペイン語	tu	(vos→) usted
ドイツ語	du	(Ihr→er→) Sie

Brown & Gilman は「The Pronouns of Power and Solidarity」(1968)において、上記の六つのヨーロッパ言語の二人称代名詞を分析している。

語史を調べると、二人称の単数形が二つになったのは4世紀であり、ラテン語の複数形「vos」が皇帝に対して使われるようになったことに始まる。後、皇帝以外の力のある人に対しても使われるようになり、数世紀にかけて、徐々に使い分けがはっきりしなくなったが、12世紀から14世紀頃になると、非対称の「power semantic」（力関係の要因）が常識になった。目上の人が目下の人に対して T 形を使用し、逆に V 形と呼ばれた。相手が同等の場合は、相互的に同じ代名詞を使用し、上流階級は V 形、下層階級は T 形を用いた。

更に、同等の関係に使われていた代名詞には区別がなかった状態から、徐々に親密度という要因の影響が強まってきた (図 2)。力関係のない同等の関係では、親密度の程度が V 形、または T 形の相互的な使用で示され、親密度が低い場合に V 形が使われるのである。X が Y に対して力を持っているという力関係の非対称性と異なり、親密度は、X と Y が共通の背景、または興味を通じて、お互いに親密さをもつということによって、対称的である。

図 1: T/V 代名詞の用法と Power and Solidarity  
(Brown & Gilman, 1968 の図を基に作成)



19世紀までは、T/Vの使用に関しては、力関係の要因が優性であったが、その後、親密度の方が優勢になってきた。現在では、Tの使用は相互の親密度を示し、Vの使用は相互の親

密度のなさを示すようになっている。

### 3. 日本語における対称詞

日本語における二人称代名詞は T/V 代名詞と様々な面で異なる。例えば種類は、日本語の方が多く、歴史的な観点から見ると、T/V 代名詞は意味的・形式的に殆ど変化していないにもかかわらず、日本語においては、形がかなり変化した。1,600 年間使われてきた T/V の二つの形に対し、(日本国語大辞典を使って調査したところ) 1,300 年にかけて 104 語以上の対称詞が使われ、平均にすると 13 年に 1 語新しい表現が生まれてきたということになる。

#### 3.1 現在の対称詞の語源と歴史

現在用いられている対称詞の中では、キミが最も古くから使用されており、上代から中世にかけて敬愛の意をもって目上、または同等の相手を指した。近世には一時期その形が使われなくなったが、明治時代になると再び書生言葉等に現れ、その後一般に使われるようになった。元々は国の君主・天皇という意味をもつ名詞であった。

キサマは「キミ(君) + サマ(様)」の変化した語であり、中世末頃に発生した対称代名詞で、武家の書簡でかなりの敬意をもって用いられた。しかし、その後口語化し、一般庶民にも用いられるようになるに従って次第に敬意を失い、18 世紀の後期には、軽い敬意を保ったにすぎず、19 世紀初期になると同等に対する語となった。更に天保期(1830-1844)に至ると、目下の者に対して用いられるようになり、近世末には完全に上流社会では用いられなくなった。

オマエは、神仏や貴人の前を敬ってという名詞であったが、直接人を指さないことによって尊敬をもつ対称詞としても用いられた。江戸前期までは、敬意の強い語として上位者に対して用いられたが、1770-80 年頃には上位もしくは対等者に、さらに 1810-30 年頃になると、同等もしくは下位者に対して用いられるようになり今日に至った。

対称のアナタは、近世の中期頃から目上の者に対して用いられた尊敬語であった(山口、他 1997)。「アノカタ」の約と言われ、中世には他称詞として用いられた。明治時代には、親や目上の人に対して用いられ、その後敬意

が落ち、現在は同等もしくは目下の者に対して使う。アナタは、「アナタ」の変化した語であり、最初は遊郭で用いられ、後一般化した。近世後期、上位者に対して使用されたが、現代、多く下位者に用いる。

テメエは、近世語の「テマエ」の転であり、同等または目下に対して用いられた。現在、テメエは下位者にしか用いられなくなり、テマエは使わなくなった。

#### 3.2 日本語における対称詞の三つの特徴

上記のように単語の歴史を見ると、日本語の対称詞の様々な特徴が明らかになる。Miller (1967:341)と 鈴木 (1973:141)が言うように、日本語には、欧米語にあるような「純粹」な人称代名詞はないと考えられる。つまり、全ての単語は、最初から人称代名詞として用いられたのではなく、他の名詞カテゴリーから借りられた。例えば、キミ・キサマは天皇のことを敬って指す語であったり、オマエ・テメエは場所を示す語であった。

言葉が人称代名詞として用いられるようになると、使われる期間が限定されていて短い。キミの様に、長期間残る例もあるが、殆どの場合は数百年以内に形が消えてしまう。これに関連しているもう一つの特徴は、時間の経過に従って、丁寧さの度合いが減ってくる。T/V 代名詞にも同じ現象が見られたが、日本語の場合は、減少の進行が速い。

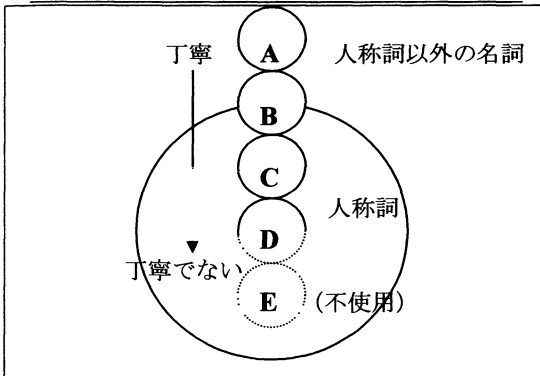
これらの特徴は、日本語のボライトネス・システムの結果であると考えられるが、どういった理由が考えられるであろうか。

#### 3.3 丁寧さによる人称代名詞のタブー

遠回し表現(indirectness)は、丁寧さの一つの手段であり(Finegan et.al., 1992)、日本語のコミュニケーションの特徴の一つでもあるといわれている。人称代名詞は、人を直接的に指す語になれば、日本語ではタブーとなり(鈴木 1973)、特に相手が目上の者・外の者で丁寧さが必要な場合は、使用が限定されている(Mizutani & Mizutani, 1987)。相手を指す言葉がどうしても必要になると、丁寧さの程度を保つため、様々な手段が利用される。例えば、名前につく接辞のサマ・サンの使用、相手の身分を示す「シャチョウ」や「センセイ」の使用、または、遠回しの効果を目指し、人称

詞以外の一般の名詞カテゴリーから単語を借りること（例：ソチラ・オタク）等。借りた単語が対称詞として広く使われるようになってくると、婉曲性が徐々に減り、同時に人称代名詞として定着してくる。これによって丁寧さも減り、用いられるコンテキストが少なくなり、新たに婉曲語を借りなくてはならないことになる。

図2: 日本語の人称代名詞のライフサイクル。



- A:**婉曲表現の名詞が人称詞に使われる。  
(例：ソチラノハウ)
- B:**名詞としての意味と丁寧さを保ちながら、  
人称詞としての使用が増える。  
(例：ソチラ、オタク)
- C:**対称詞として広く使われるようになり、  
名詞としての意味と丁寧さが減る。  
(例：アナタ・オマエ)
- D:**丁寧さがなくなり、用いられるコンテキ  
ストが限られる。(例：テメエ)
- E:**丁寧さを完全に無くし、使われなくなる。  
(例：ソナタ)

日本語の人称代名詞に関するこういったタブーが、これまで見てきた日本語の二人称代名詞の特徴、特にその使用の限定の原因であると考えられる。すべてが最初に存在した婉曲性を無くし、同等以下の者にしか使えなくなった。更に使えるコンテキストがより限定され、最終的に使用されなくなるのであろうと考えられる。

#### 4. 日本語の対称詞と T/V 代名詞の比較

T/V 式言語の話者が聞き手との距離をおく V

形式を選択するか、親密さを示す T 形式を選択するかということを決定しなくてはならないように、日本語の話者は発話時に丁寧な形式(P)、もしくは丁寧ではない形式(NP)を選択しなくてはならない。相手が知らない者・年上の者・目上の者であれば、丁寧な形式を使用し、年下・知人・同等もしくは目下の者であると、丁寧ではない形式を選択する。いわゆる日本語の二人称代名詞は、上位の相手には用いられないので、丁寧ではない T 形式に当り、3.3 で見た遠回しの言い方は丁寧な V 形式に当たる。

日本語と T/V 語の両言語の話者には、どちらも形式の選択が必要であるが、日本語の場合の方が、その決定がより複雑であると言え、図3のようにまとめることができる。

図3:対称詞の選択に影響する要因:

#### T/V 式言語と日本語

T/V 式言語		日本語
POWER	SOLIDARITY	
地位 (不変的) 目上→V 目下→T	親密さ (可变的) 疎→V 親→T	地位 (不変的) 目上→P 目下→NP 年齢 (不変的) 年上→P 年下→NP 親密さ (可变的) 疎→P 親→NP

(P = polite; NP = non-polite)

T/V 言語では、最初は力関係により T/V 代名詞の使用が決まり、途中、過渡期を経ながら、現在は親密度によって T/V 形の使用が決まる、というように、形式の選択は比較的に簡単であった。

日本語の場合は、同時に相手の地位、年齢、二人の間の親密さを考察しなければならず、形式の選択が複雑である。地位と年齢の関係はほぼ固定している要因であるが、親密さは固定していなくて、話者と聞き手の地位、または年齢が同じであれば、決定が親密さに影響される等、三つの要因が複雑に絡み合うからである。

以上のことを要約すると図4のようになる。

図 4: 対称詞の選択：T/V 式言語と日本語

	T/V 式言語		日本語
	Power (13 世紀)	Solidarity (現在)	
丁寧な形式 (V・P)	上流階級 上位者	疎 (non-solidary)	疎 上位者/年上
	下層階級		親
丁寧でない形式 (T・NP)	上流階級	親 (solidary)	疎
	同等 下層階級		同等/同年 親
	上流階級 下位者		疎
	下層階級		下位者/年下 親

図 4 でわかるように、日本語の対称詞の使用には、Brown & Gilman が論じた T/V 言語の力関係（地位）と親密度という時代別の要因が、両方同時に時代を通じてかかっているのである。T/V 式言語では、使用の要因が時代によって力関係から親密度に移動したが、日本語では、両方の要因が常に同時に影響してきたことが違いと考えられる。

## 5. おわりに

本論文は、T/V 式言語と日本語における対称詞の発達を歴史的に比較し、表面的に様々な面で異なっている二つの言語において、その根本的な要因を考察することによって違いと共通点を体系的に明らかにした。

どちらの言語においても、話者が丁寧な形式・丁寧ではない形式の選択が必要なのであるが、話者と聞き手の地位関係と親密さの程度という二つの要因が形式の選択に影響するという共通している。しかし、T/V 式言語では、二つの要因が異なる時代に影響してきたにもかかわらず、日本語では、二つの要因が同時に歴史を通じて働いているということが明らかになった。

## 参考書

- Brown, Roger and Albert Gilman (1968). "The Pronouns of Power and Solidarity". In J. A. Fishman (ed.) *The Sociology of Language*. The Hague: Mouton. 252-275.
- Finegan, Edward, Niko Besnier, David Blair, and Peter Collins (1992). *Language: Its structure and use*. Marrickville: Harcourt Brace & Company.
- Miller, Roy (1967). *The Japanese Language*. Chicago: University of Chicago Press.
- Mizutani, Osamu, and Nobuko Mizutani (1987). *How to be Polite in Japanese*. Tokyo: The Japan Times.
- 鈴木孝夫(1973). ことばと文化－東京：岩波新書.
- 日本大辞典刊行会(1972). 日本国語大辞典－東京：小学館.
- 山口明穂、鈴木英夫、坂梨隆三、月本雅幸(1997). 日本語の歴史－東京：東京大学出版会.